

## ケータイ社会を生きる —携帯電話とメディア・リテラシー—

畠山 亮太 (FCT 会員)

現代の情報社会において、私たちに最も身近なメディアは何であろうか？ テレビであろうか？ 新聞であろうか？ それともパソコンであろうか？ 人によって答えはさまざまであろう。しかし、この問いに対して「ケータイ！」と答える人は、特に若い人たちを中心にかなりの数に上るのではないか。これまでメディア・リテラシーといえば、テレビや新聞に偏る傾向があったが、これほどまでに現代社会に浸透（氾濫？）している携帯電話を取り上げたことは、それほど多くないと思われる。そこで今回は、「携帯電話」に関するメディア・リテラシーについて、考えてみたいと思う。

携帯電話の契約数は、2004年8月末の時点で約347万件であり、日本の人口のおよそ65%にもなる(1)。携帯電話自体も日々進化してゆき、電話・電子メール・インターネット・カメラ・ビデオ・音楽・テレビなどの諸機能から、銀行振り込みやチケット予約、買い物までできるようになってきている。また、登場当初は、ビジネスマンの仕事のための単なる道具に過ぎなかったものが、ポケベルブームの延長線上で若者たちに受け入れられ、今や主婦層はもちろん、小学生や高齢者まで携帯電話を所有する状況に至っている。

「最低1人1台の携帯電話」の時代も決して遠くない今日、私たちのあらゆる生活領域に及ぶまでになった携帯電話によって、社会はどのように変わってきたのであろうか。そこで、携帯電話の課題として考えられる事柄をいくつか挙げ、携帯電話の特性とそれによる

私たちの生活の変化の一端を探ってみたいと思う。

### 「私的空間」の創出

携帯電話についてまず問題にされるのが、公共空間とマナーの問題である。常に問題にされる電車内や授業中におけるケータイの使用などはもちろん、もっと広い意味で捉えるならば、他者と対面している場面におけるケータイの使用である。例を挙げると、友人とのおしゃべりの最中や家庭での食事中にケータイが鳴り、目の前の相手を「無視する」かたちでケータイの相手とおしゃべりをする、といったような状況である。「友人や家族とのプライベートな時間」という場面は、「公共」とは言えないかもしれないが、目の前の相手に不愉快な思いをさせる可能性が高いという意味では、「公共的な空間（場面）」ということもできなくもない。これらに共通することは、携帯電話が、「公共空間」のなかに「私的空間」を作り出す機能を備えているということである。そもそも、電話というメディアは私的なメディアである。しかし、携帯電話が普及する以前は、電話機は公共施設や家庭に定められた場所や、街中の電話ボックスなど、「私的空間として利用しても許容される場所」に設置されていた。しかし、文字通り「携帯」できる私的メディアは、ありとあらゆる場所を「私的空間」に変える力を持っており、「私的空間」を携帯しているということもできる。

### 匿名性と情報量の逆説性

次は、携帯電話の匿名性の問題である。パソコンのインターネットとも共通するが、この問題に関して真っ先に思い浮かぶことは、「出会い系サイト」ではないであろうか。「出会い系サイト」が発端となった事件としては、殺人事件、援助交際・売買春、最近では、ネットによって集まった人による集団自殺などがある。警察庁のまとめによると、「出会い系サイト規制法」が施行（2003年9月）された2003年の1年間に、出会い系サイトが関係した事件の摘発総数は1746件で、児童買春（791件）、青少年保護育成条例違反（448件）の順であり、被害者の84%（1262人）が18歳未満の女子（高校生597人、中学生397人、小学生4人）であったという（2）。こうした問題の原因のひとつが、インターネットの匿名性である。お互いに顔も名前も素性もわからず（正確な情報であるのか判断できず）、手掛かりは画面上に映し出される画一的な文字情報だけである（しかも、その信憑性も疑わしい）。こうした、情報が膨大に詰まっている反面、判断材料となる情報が少ないという逆説性は、ネットの大きな特質である「匿名性」が生じさせたものであろう。

### 秘匿性と行動の個別化

3点目に焦点を当てようと思うのは、携帯電話が持つ「秘匿性」である。これは、右記二つの論点とも重なり合う内容であるが、つまり、持ち運びができ、匿名的であるがゆえに、周囲の人びとの目を盗んでケータイを使用できるということである。小中学生の家族が、子どもたちにケータイを持たせたくないと感じる最も大きな理由も、この秘匿性に関係があるのではないであろうか。ケータイを持つことで何か事件に巻き込まれるのではな

いかと心配することはもちろん、そこまで大袈裟でなくとも、自分たちの子どもがどんな相手と繋がり、どんな情報にアクセスしているかを把握できない不安は、子どものケータイ所持を禁止するには十分な理由であると想像できる。子どもたちのテレビや新聞への接触なら、ある程度の把握やコントロールは可能であるが、家の外へも、トイレの中へも、ベッドの中にも持ち込め、また、情報がダイレクトに子どもたちに届くケータイはそうもいかない。おまけに、勝手にケータイをいじったり、メールを見ようものなら、家族への反発や不信感を募らせ、家族から気持ちが離れた子どもたちは、ますますケータイの「トモダチ」の方へ寄ってゆく、という悪循環に陥ることもある。

また、これに伴い、行動全般がケータイに左右される事態が生じてくる可能性もある。近年の子どもたちは、際限のない「孤独感」や「疎外感」に脅かされていると言われている。つまり、「自分自身の存在を確かめる」ために、絶えず「だれかとつながりたい」欲求（強迫観念？）が生じているというのである。ケータイはその欲求を満たすツールであり、それゆえ、ケータイを一時も手放せず、ケータイ中心の生活になるのではないか。「ケータイをうちに忘れてきちゃった！ どうしよう……」「何をしてても電話がきたらすぐに出なくちゃ！」「メールの返事が返ってこない」と死にたくなる……」という具合である。そして、何よりも見過ごしてはいけないことは、いつも顔を見ながら過ごしている家族よりも、電波の向こう側の顔の見えない「トモダチ」が、「自分の存在を証明してくれる」その「だれか」になってしまっていることであろう。

以上、携帯電話についてのいくつかの問題に触れてきたが、もちろん、携帯電話にはマイナスの面ばかりではなくプラスの面もある。むしろ、携帯電話の特性とともに、今日のメディア社会の特性を理解し、その長所を活かすような使い方をすれば、これほど便利で、楽しいメディアはないのではないかとさえ思えてくる。では、携帯電話を便利で楽しいメディアに変えるにはどうすればいいのであろうか。その一つの方法こそが、メディア・リテラシーであると確信している。

メディア・リテラシーの定義は次の通りである——「メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創り出す力を指す。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという」（3）。つまり、メディア・リテラシーは、メディア社会で生きるために、メディアをクリティカルに分析する力と多様な形態でコミュニケーションを創り出す力を獲得することを目的としている。携帯電話は、もはや「電話」とは言えないほどマルチメディア性を備え、多種多様な情報を相互にやり取りできる。そのため私たちは、時間や場所を問わず、多種多様な情報のダイレクトな発信者にも受信者にもなることができる。だからこそ、携帯電話を扱うには、メディア・リテラシーの獲得が必要不可欠の条件であると言わざるを得ない。そして、それは、携帯電話を所有しているその人自身だけではなく、子どもに携帯電話を持たせようとしている（あるいは、すでに持たせている）家族にも同様の話である。

先程も述べたように、携帯電話は、その「匿名性」という特質によって、情報の過大と過小とが同時に発生している。そうした膨大な

情報の中に身を置きながら日々生活してゆくには、その情報を社会的文脈においてクリティカルに分析する能力がなくてはならない。

「虚偽」の情報に踊らされたり、甘い罠に引っ掛かったり、犯罪に巻き込まれないための一番の近道がメディア・リテラシーの獲得だと考えられる。

また、メディア・リテラシーの獲得における重要な取り組みのひとつが「対話」である。他者との対話、ひいては自己との対話を通して、知識や洞察力を学ぶのである。携帯電話を子どもたちに持たせている家族は、子どもたちと携帯電話について話し合ってみるのもいいかもしれない。子どもたちと携帯電話について話すことで、携帯電話やメディア社会についてより深く知り、携帯電話をより便利に楽しく使えるようになるとともに、子どもたちとの間にコミュニケーションが生まれ、「自分の存在を証明してくれるだれか」がケータイの相手から、目の前の家族に代わるかもしれない……というのは楽観視しすぎであろうか。ただ、忘れてはいけないのは、子どもたちと話す際に、家族の意見を一方的に押し付けたり、子どもの意見を頭ごなしに否定してはいけないということである。メディア・リテラシーには「正解」がない。子どもを自分と同等の「ひとりの人間」とみなし、子どもたちの言葉に耳を傾けながら話してゆく。それが「対話」であり、それこそがメディア・リテラシーの取り組みの基本姿勢だからである。

冒頭でも述べたが、携帯電話についてのメディア・リテラシーは、まだ、それほど多く取り組まれてはいない。しかし、携帯電話がこれほど一般化し、飛躍的に進化している今日、これを避けて通ることはできない。この論稿を第一歩として、わたし自身も「ケータ

イ社会」を生きるためのメディア・リテラシーの獲得をめざしていきたいと思う。

(はたけやま りょうた)

(1) 『imidas 2005』及び『統計でみる日本』  
参照

(2) 日本子どもを守る会編『子ども白書  
2004』196頁より

(3) 鈴木みどり編『メディア・リテラシー  
を学ぶ人のために』8頁より

●引用・参考資料

『imidas 2005』集英社、2005

『統計でみる日本』総務省統計局監修／財団  
法人日本統計局協会編集、2005

『子ども白書 2004』日本子どもを守る会編  
草土文化、2004

『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』  
鈴木みどり編、世界思想社、1997

『ケータイ学入門』岡田朋之・松田美佐編、  
有斐閣選書、2002

『若者はなぜ「繋がり」たがるのかーケータイ  
世代の行方ー』武田徹、PHP 研究所、2002

『若者たちに何が起きているのか』中西新  
太郎、花伝社、2004

※ 本稿は月刊『解放教育』05年10月号に掲  
載されたものを転載させていただきました。

— 『fctGAZETTE』No. 87(2006年1月)掲載—